



TITLE:

浸水事故で思ったこと<特集：図書館の浸水事故と復旧>

AUTHOR(S):

富田, 博之

CITATION:

富田, 博之. 浸水事故で思ったこと<特集：図書館の浸水事故と復旧>. バベルの図書館：総合人間学部図書館報 2005, 9(2): 3-5

ISSUE DATE:

2005-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/153046>

RIGHT:

浸水事故で思ったこと

富田 博之

昨年末の閲覧室の給水管破裂・浸水事故は、まさに「寝耳に水」の驚愕でした。皮肉にも前々日の 22 日に原監事による図書館業務監査があつて、「この図書館は利用者の様々な形態の利用や蔵書の要求にあわなくなっているのです、早急に改修、できれば改築に力を貸していただきたい」と訴えた、まさにその直後のことでした。法人化前には経験のなかった業務監査への対応に図書館職員をはじめ執行部、図書委員長は緊張し、それを無事終えて正直なところホッとしていたところで、まるで図書館の建物そのものまでもが緊張が解けて崩れ落ちたかのごとき体でした。この浸水事故により、第三高等学校から引き継いだ貴重な資料や、教養部、総合人間学部、人間・環境学研究科の諸先生方が収集されてきた書籍の約 1 % を破損したことに對し、部局の管理責任者として誠に申し訳の立たないことをしてしまったと後悔しています。

浸水発見の通報を受けて深夜に出勤し緊急の対応をして頂いた施設管理掛長、図書館職員とそのご家族、翌朝からの排水作業、被害図書避難に総掛かりで働いて頂いた図書館、中央事務、専攻事務の職員、その翌日から続いた暖房なしの 2 階閲覧室でカビ臭に耐えながら書籍の除水作業を黙々とやって頂いた職員、学生・院生、そして業者の方々に対して、あらためて心よりお礼申し上げます。これらの全ての方々のご尽力で予想外の短期間に図書館機能を復旧できたことは言うまでもないことなのですが、個人的に印象に残ったことを 2、3 紹介して記録しておきたいと思います。

何日目だったか正確に覚えていないのですが、本の各ページに吸い取り紙をはさむ除水作業が続いている最中のことです。岡野閲覧掛長がやにわに「これから冠水図書の目録作りにとりかかります」と言ってきました。岡野さんのいつもの突拍子もない言い方なので、内心、(この 3000 冊以上もある、およそ借り出される可能性があるとも思えない本に対して、なんと無謀なことを！)と怪訝に思い、「それではよろしくお願いします」という言葉も出ず、思わず「は？」という疑念の声を発しただけで別れました。その翌日、もうその作業が終了したという報告を受け、真実、驚きました。まず一つには、私が無謀と思ったのは、大半がバーコードの読み取りとデータベースからの参照ですむという整理業務の現状を理解できていなかった私の無知によるものであつて、掛長にすれ

ば作業の確実な目算を立てての計画であったのだということを、この時になって始めて知ったことです。もう一つは、私がこれらの図書はまずは借り出されることはないだろうと軽く考えたこと、これも私の不徳でした。毎日カウンターに座って利用者に直接接しておられる方々の真摯な気持ちとは、いかにかけ離れていたかを恥じ入りました。大げさな言い方をすると彼らのプロ根性です。このプロとしての責任感と、日頃の業務の体験から科学的に割り出した作業時間に関する現実的な見通しとをマッチさせた上での、掛長の堅実な作業計画であったということが、貴重な経験として印象に残りました。

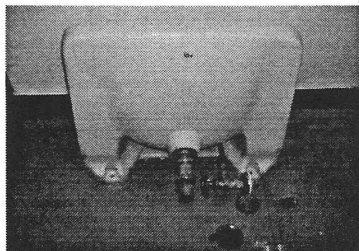
恥のかきついでにもう一件紹介しておきます。地下へ流れ出た水は床板に沿って流れて東のすみにたまったため、地下 2 階の東すみに置かれていた掛図類がかなりの被害を受けました。266 種 420 点あった掛図類は、想像に難くないでしょうが地図類が最も多く、いかにも貴重な資料であることがうかがえる、伊能忠敏の地図を元にした明治初年の精緻な地図も含まれていました。掛図の中で最も貴重だということになり完全な修復に出したのは、1800 年代の英国製の「チャンバーズ科学掛図」3 軸です。力学のてこの原理や慣性の法則を日常生活のいろんな場面を例にして、ていねいな絵で図解したものです。私は物理学・物理教育が専門ですから、もちろん最初にそれに目が止まりました。しかしながら逆に単純な物理屋の目で見えてしまい、旧制高校の教育水準から考えて「こんなもの、大したものではないよ」と口を滑らせてしていました。ところが翌日、近代の西洋と日本の文明交流を研究しておられる松田清先生が 1 点 1 点、デジカメに撮りながら見てまわってこれを発見し、この時代のこの掛図が 3 点セットで残っているのは恐らくここだけであろう、これはきちんと修復しておこうということになった次第です。考えてみれば、てこの原理なんて日本でも大昔から利用されていましたが、これが科学理論として系統的に教育されるようになったのは明治以降の近代教育においてであって、おそらく掛図は初等教育の現場で利用される教材の原点になったものと考えられます。したがって少なくとも近代教育史をやる人にとっては、まさに捨てがたい貴重な資料に違いないのです。私にはそれを原資料として見る目が欠けていたわけです。日頃から軽率の誹りを受けている私らしい大失敗でした。幸い、この 260 種に及ぶ掛図類も、整理掛の河村さんたちの苦心の作業により目録が完成しました。こういう事故でもないとおそらく半永久的に目録なんて出来上がらなかつたと思います。こちらは書籍とちがってバーコードやデータベースなどあるはずがなく、1 点 1 点読みづらいタイトルを読み取って完成していただきました

た。

年納めと慰労を兼ねた 28 日夕刻の集まりで福井事務長が挨拶していたように、若い職員、学生・院生の皆さんには、二度とあってはならないことですが不幸にして同じような事故にどこかで遭遇した場合に、まず何をしなければならぬかということをしっかりと肝に銘じて今回の経験を生かしてほしいと思います。

(とみた ひろゆき、人間・環境学研究科長・総合人間学部長)

Photo Album 1



腐食して破裂した給水管
現在では、撤去されている